

二世の契

泉鏡花

青空文庫

真中に一棟、小さき屋根の、恰も朝凧の海に難破船の倂のやう、且つ破れ且つ傾いて見ゆるのは、此の広野を、久しい以前汽車が横切つた、其の時分の停車場の名残である。

路も纔に通ずるばかり、枯れても未だ葎の結ばれた上へ、煙の如く降りかゝる小雨を透かして、遠く其の寂しい状を視めながら、「もし、お媪さん、彼処までは何のくらゐあります。」

と尋ねたのは効々しい獵装束。顔容勝れて清らかな少年で、土間へ草鞋穿の脚を投げて、英国政府が王冠章の刻

印打つたる、ポネヒル二連発銃の、銃身は月の如く、銃孔
は星の如きを、斜ななめに古ふる置だたみの上に差置いたが、恚こう聞うく中に、
其の鳥打帽とりうちぼうを搔取かきとると、雫しずくするほど額ひたいがみ髪かみの黒く軟やわらかに濡ぬれ
たのを、幾度いくたびも払はひつゝ、太いたく野路のじの雨あめに悩なやんだ風情ふぜい。
縁側えんがわもない破屋あばらやの、横よこに長いのを二室ふたまにした、古ふるび曲ゆがんだ柱
の根ねに、齡よわ七十路ななそじに余ある一人ひとりの媪おうな、糸いとを繰くつて車くるまをぶうく、静しずか
にぶうく。

「然そうぢやの、もの十七八町ちやうもござらうぞ、さし渡わたしにしては沢た
山さんもござるまいが、人の歩ある行く路みちは廻まわり廻まわり廻まわり居うるで、半里はんり
の余よもござりましよ。」と首くびを引込ひ込め、又また揺出ゆりだすやうにして、旧
停ステ車エシ場ンの方かたを見みながら言いつた、媪おがしよぼくした目は、恚こう

やつて遠方のものに摺りつけるまでにしなければ、見えぬのであらう。

それから顔を上げ下しをする度に、恒は何処にか蔵して置からしい、がツくり窪んだ胸を、伸し且つ竦めるのであつた。

素直に伸びたのを其のまゝ撫でつけた白髪しらがの其それよりも、尚多なおいのは膚はだの皺しわで、就なかんずく中なか最も深く刻まれたのが、脊せを低く、丁ちようど

糸車を前に、枯野かれのの末に、埴生はにゆうの小屋など引くるめた置物同然に媪おやを畳たたみ込んで置くのらしい。一度胸を伸のぼして後へ反そるやうにした今の様子で見れば、瘡やせさらばうた脊丈せたけ、此この齡よわいにしては些ちと高過ぎる位なもの、すつくと立つたら、五六本細いのがある背せ戸どの榛はんの樹立こたちの他ほかに、珍しい枯木かれきに見えよう。肉ひは干ひび、皮しな菱なび

て見るかげもないが、手、胸などの巖乗さ、渋色に亀裂が入つて下塗の漆で固めたやう、未だく目立つのは鼻筋の判然と通つて居る顔備と。

黒ずんだが鬱金の裏の附いた、はぎくの、之はまた美しい、褪せては居るが色々、浅葱の麻の葉、鹿子の緋、国の習で百軒から切一ツづゝ集めて継ぎ合す処がある、其のちやんくを着て、前帯で坐つた形で。

彼の古戦場を過つて、矢叫の音を風に聞き、浅茅が原の月影に、古の都を忍ぶたぐひの、心ある人は、此の媼が六十年の昔を推して、世にも希なる、容色よき上臈としても差支はないと思ふ、何となく犯し難き品位があつた。其の尖つた顚のあた

りを、すら／＼と靡なびいて通る、綿わたの筋かすかの幽かすかに白きさへ、やがて霜しもになりさうな冷つめたい雨。

少年は炉ろの上へ両手を真直まっすぐに翳かぎし、斜ななめに媪ななめの胸のあたりを窺うかがうて、

「はあ其では、何か、他ほかに通るものがあるんですか。」

媪おばあは見返りもしないで、真向まっこう正面びようびように渺々びようびようたる荒野あれのを控へ、

「他ほかに通るかとは、何がでござるの。」

「否いいえ、今謂いつたちやないか、人の通る路みちは廻り／＼蛇うねつて居るつて。だから聞くんですが、他ほかに何か歩行あるきますか。」

「やれもう、こんな原ぢやもの、お客様きつね、狐も犬も通りませいで。霧きりがかゝりや、歩あるかうず、雲おりが下りや、走はしらうず、蜈蚣むかでも潜もぐれば

蝗いなごも飛ぶわいの、「と孫にもものいふやう、顧かえりみて打微笑うちほほえむ。

二

此の口からなら、譬たとひ鬼が通る、魔が、と言つても、疑ところふ処もなし、又そ然う信ずればとて驚くことはないのであつた。少年は姓桂木かつらぎし氏、東京なる某なにがし学校の秀才で、今年夏のはじめから一種憂ゆう鬱うつな病にかゝり、日を経ふるに従うて、色も、心も死灰しかいの如く、やがて石碑いしぶみの下に形なき祭まつりを享けるばかりになつたが、其の病の原因もとはと、渠かれを能く知る友だちが密ひそかに言ふ、仔細あつて世はよを早はやうした恋なりし人の、其の姉あねぎみ君なる貴夫人より、一いっ挺ちよう最新

式の獵銃を賜はつた。が、爰に差置いた。即是。

武器を参らす、郊外に獵などして、自ら励まし給へ、聞くが如き其の容体は、薬も看護も効あらずと医師のいへば。但御身に恙なきやう、わらはが手はいつも銃の口に、と心を籠めた手紙を添へて、兩三日以前に御使者到来。

凭りかゝつた胸の離れなかつた、机の傍にこれを受取ると、額に手を加ふること頃刻にして、桂木は猛然として立つたのである。

扨今朝、此の辺からは煙も見えず、音も聞えぬ、新停車場で唯一人下り立つて、朝霧の濃やかな野中を歩して、雨になつた午の時過ぎ、媼の住居に駈け込んだまで、未だ嘗て一度も

煙を銃身に絡めなかつた。

桂木は其の病まざる前の性質に復したれば、貴夫人が情ある贈物に酬いるため——函嶺を越ゆる時汽車の中で逢つた同窓の学友に、何処へ、と問はれて、修善寺の方へ蜜月の旅と答へた——最愛なる新婚の婦、ポネヒル姫の第一発は、仇に田嶋山鳩如きを打たず、願はくは目覚しき獲物を掲げて、土産にしようと思つたので。

時ならぬ洪水、不思議の風雨に、隙なく線路を損はれて、官線ならぬ鉄道は其の停車場を更へた位、殊に桂木の一家族に取つては、祖先、此の国を領した時分から、屢々易からぬ奇怪の歴史を有する、三里の荒野を跋涉して、目に見ゆるもの、手に

立つもの、対手あいてが人類の形でさへなかつたら、覚えの狙ねらい撃うちで射いて取らうと言ふのであるから。

霧も雲も歩ある行くと語つた、仔細おうなありげな媼ことばの言を物ともせず、暖めた手で、びツしよりの草鞋わらじの紐ひもを解ときかける。

油断はしないが俯うつむ向むいたまゝ、

「私は又また不思議な物でも通るかと思つて悚然ぞつとした、お媼ばあさん、此こんな処ところに一人ひとりで居て、昼間だつて怖おそしくはないのですか。」

桂木は疾とく媼おの口くちの、炎はでも吐はけよかすと、然さり気げなく誘よひかける。

媼おは額ひたいの上うへに綿わたを引ひいて、

「何が恐おそしからうぞ、今時の若いお人にも似ぬことを言はつしや

る、おおかみ狼よりあまもり雨漏が恐しいと言ふわいの。」

と又背をまた屈め、かが胸を張り、手でこするが如くにし、と外の方をかた覗いたが、

「むかうへむくくと霧が出て、そつとして居る時は天気ぢやがの、こちら此方の方から雲が出て、そろく両方から歩行あよびよつて、一とつ所になる時が此の雨ぢや。びしよく降ると寒うござるで、老としよ寄りには何より恐しうござるわいの。」

「あゝ、私も雨には弱りました、じとく其処等そこらじゆう中へ染しみこ込んで、この気味の悪さと云つたらない、お媪ばあさん。」

「はい、御難儀ごなんぎでござつたる。」

「お邪魔じやまですが此処ここを借ります。」

桂木は足袋たびを脱ぎ、足の爪尖つまさきを取つて見たが、泥にも塗れず、綺麗きれいだから、其のまゝ筵むしろの上へ、ずいと腰を。

たとひ洗せん足を求めた処ところで、媪おうなは水を汲くんで呉くれたか何どうだか、根の生えた居ゐずまひで、例の仕事に余念おんげんのなさ、小笹おんざさを風が渡わたるかと……音につれて積たる白糸しろいと。

三

桂木は濡ぬれた上衣うわぎを脱すぎ棄すてた、カラアも外はずしたが、炉いろのふちに尚なお油断あぶらだんなく、

「あゝ、腹はらが空すいた。最もうく降ふるのと溜たまつたので濡ぬれ徹とおつて、

帽子から雫が垂れた時は、色も慾も無くなつて、筵が一枚ありや極樂、其処で寝たいと思つたけれど、恚うしてお世話になつて雨露が凌げると、今度は虫が合点しない、何ぞ食べるものはありませんか。」

「然ればなう、恐し気な音をさせて、汽車とやらが向うの草の中を走つた時分には、客も少々はござつたで、瓜など剥いて進ぜたけれど、見さつしやる通りぢやでなう。私が食る分ばかり、其も黍を焚いたのぢやほどに、逆もお口には合ふまいぞ。」

「否、飯は持つてます、何うせ、人里のないを承知だつたから、竹包にして兵糧は持参ですが、お菜にするものがないんです、何か些と分けて貰ひたいと思ふんだがね。」

おうな

媪は胸を折つてゆるやかに打 頷き、

「それならば待たしやませ、塩ツぱいが味噌漬の香の物がござるわいなう。」

「待ちたまへ、味噌漬なら敢てお手数に及ぶまいと思ひます。」

と手早く笹の葉を解くと、硬いのがしやつちこぼる、包の端を
 圧へて、草臥れた両手をつき、畏つて熟と見て、

「それ、言はないこつちやない、果して此の菜も味噌漬だ。お媪
 さん、大きな野だの、奥山へ入るには、梅干を持たぬものだつ

て、宿の者が言つたつけ、然うなかね、」と顔を上げて又瞻つ

たが、恚る相好の媪を見たのは、場末の寄席の寂として客が唯

二三の時、片隅に猫を抱いてしよんぼり坐つて居たのと、山の

中で、薪を背負つて歩行いて居たのと、これで三人目だと桂木は思ひ出した。

媼は皺だらけの面の皺も動かさず、

「何うござらうぞ、食べて悪いことはなからうがや、野山の人はの、一層のこと霧の毒を消すものぢやといふげにござる。」

「然う、」とばかり見詰めて居た。

此時気だるさうにはじめて振向き、

「あのまた霧の毒といふものは恐しいものでなう、お前様、今日は彼が雨になつたればこそ可うござつた、ものの半日も冥土のやうな煙の中に包まれて居て見やしやれ、生命を取られいだから三月四月煩うげな、此処の霧は又格別ぢやと言ふわいなう。」

「あの、霧が、」

「お客様、お前さま、はじめて此処ここを歩行あるかつしやるや？」

桂木は大胆に、一口食べかけたのをぐツと呑込みのみこ、

「はじめてだとも。聞いちや居たんだけれど。」

「然そうぢやろ、然そうぢやろ。」と媪おうなはまた頷うなずいたが、単ただ然そうであ

らうではなく、正まさに然そうなくてはかなはぬと言つたやうな語氣で

あつた。

「而そして何かの、お前様其その鉄砲を打つて歩行あるかしやるでござる

かの。」と糸を繰くる手を両方に開ひらいてじつと、此の媪の目は、怪

しく光つた如くに思はれたから、桂木は箸はしを置き、心で身構みがまえを

して、

「これかね。」と言ふをきツかけに、ずらして取つて引寄せた、空の模様、小雨こさめの色、孤家ひとつやの裡うちも、媼おきなの姿も、さては炉の中の火さへ淡く、凡すべて枯野かれのに描かれた、幻あいだの如き間に、ポネヒル連発銃たまごめの銃身のみ、青く閃きらめくまで磨ける鏡かと壁を射いて、弾込たまごめしたのがづツしり手てごたえ応おこたえ。

我ながら頼母たのもしく、

「何、まあね、何どうぞこれを打つことのないやうにと、内々ないない祈いのつて居るんだよ。」

「其はまた何といふわけでござらうの。」と澄すまして、例の糸を繰くる、五体は悉しっかい皆、車の仕かけで、人形の動くやう、媼おきなは少頃しばらくも手を休めず。

驚破すわといふ時、綿わたの条すじを射切いつたら、胸およに不ば及ず、咽喉のんどに不およ及ばず、玉たまの緒おは絶たえて媪たは唯ただ一個つこ、朽木くちきの像さかにならうも知れぬ。
 と桂木けいぎは心の裡うち。

四

構かまはず兵糧ひようろうを使つかひつゝ、

「だつてお媪おばあさん、此この野原のは滅多めったに人ひとの通とらない処ところだつて聞きいたからさ。」

「そりや最もう眺望ながめといつても池い一つあるぢやござらぬ、纔わずばかりの違ちがいなう、三島ふじはお富士山さの名所なぢやに、此処こは恁こう一目千里ひとめせんり

の原なれど、何が邪魔じやまをするか見えませぬ、其れぢやもの、ものずきに来る人は無いのぢやわいなう。」

「いいえ否いなき、景色がよくないから遊山ゆうさんに来ぬこの、便利が悪いから旅の者が通行せぬのと、そんなつい通りのことぢやなくさ、私たちが聞いたのでは、此の野中のなかへ入ることを、俗に身を投げると言ひ伝へて、無事にや帰られないんださうではないか。」

「それはお客様、此処ここといふ限かぎりはござるまいがなう、躓つまずけば転ころびもせず、転ころびやうが悪ければ怪我けがもせうず、打うち処どころが悪ければ死にもせうず、野でも山でも海でも川でも同じことことでござるわなう、其につけても、然そう又また人のいふ処ところへ、お前様は何をしに来さつしやつた。」

じろりと流盼しりめに見ていつた。

桂木はぎよつとしたが、

「理窟りくつを聞くんぢやありません、私はね、実はお前さんのやうな人に逢あつて、何か變つた話をして貰もらはう、見られるものなら見ようと思つて、遙はるばる々出向いて来たんだもの。人間の他ほかに歩ある行くものがあるといふから、扱さてこそと乗つかゝりや、霧や雲の動くことになつて了しまふし、活いかしちや返さぬやうな者が住んででも居るやうに聞いたから、其を尋ねりや、怪我けが過あやまち失は所を定めなといふし、それぢや些ちつとも張合はりあいがありやしな、何か珍しいことを話してくれませんか、私はね。」

膝ひざを進めて、瞳ひとみを据すゑ、

「私はね、お媼おばあさん、風説うわさを知りつゝ、恚こうやつて一人で来た位だから、打明けて云ひます、見受けた処ところ、君は何だ、様子が宛然まるで野の主ぬしでもいふべきぢやないか、何の馬鹿ばか々々しいと思ふだらうが、好事ものずきです、何どうぞ一番構ひとつはず云つて聞かしてくれ給たまへな。
 恚こういふと何かお妖ばけの催促せうそくをするやうでをかしいけれど、焦しれツたくツて堪たまらない。

素もとより其のつもりぢや来たけれど、私だつて、これ当世の若い者、はじめから何、人の命を取るたつて、野に居る毒虫か、函嶺はこねを追はれた狼おおかみだらう、今いま時詰ときつまらない妖ばけ者ものが居てなりますか、それとも野伏のぶせり山賊やまだちの類たぐいでもあらうかと思つて来たんです。霧きりが毒だつたり、怪我けが過あやまち失あやまちだつたり、心の迷まよぐらゐなことは実

は此方こつちから言ひたかつた。其をあつちこつちに、お前さんの口から聞かうとは思はなかつた。其の癖、此方こつちはお媪ばあさん、お前さんの姿を見てから、却かえつて些ちと自分の意見が違つて来て、成程なるほどこれぢや怪しいことのないとも限らぬか、と考へてる位なんだ。

お聞きなさい、私が縁続きの人はね、商人あきうどで此の節せつは立派に暮して居るけれど、若いうち一ひとしきり時困つたことがあつて、瀬戸せとのしけものを背負しよつて、方々国々を売つて歩行あるいて、此の野に行ゆ暮きくれて、其の時草茫くさぼうぼう々とした中に、五六本樹立こたちのあるのを目当めあに、一軒家へ辿たどり着いて、台所口から、用を聞きながら、旅に難なんじゅうの次第を話して、一晩泊めて貰もらふとね、快く宿をしてくれて、何どうして何どうして行暮れた旅商人たびあきうど如きを、待遇もてなすやうなも

のではない、銚ちよう子う杯びがか出ずる始末、少わい女中が二人まで給仕につ
 いて、寝るにも紅裏べにうらの絹布けんぷの夜具やぐ、枕まくら頭もとで佳いい薰かの香おりを焚こう
 く。容易ならぬ訳さ、せめて一生に一晩は、恚こういふ身の上にと、
 其の時分は思つた、其の通とおつたもんだから、夢なら覚めるなと一ひ
とや夜明とやかした迄は可よかつたさうだが。
あくるひ翌日あくるひになると帰さない、其その晩女中が云ふには、お奥やかたで館がが
 召ましますつさ。

其の人は今でも話すがね、館といつたのは、其は何どうも何とも
 気高い美しい婦人おんなださうだ。しかし何なに分ぶん生いき胆ぎもを取られるか、
 薬の中へ鍊ねり込まれさうで、恐ころさが先に立つて、片時も目を瞑ねむるわ
 けには行ゆかなかつた。

私が縁続きの其の人はね、親類うちでも評判の美男だったのです。」

五

桂木は伸びて手首を蔽はんとする、襦衣の袖を捲き上げたが、手も白く、戦を挑むやうではない優しやかなものであつた、けれども、世に力あるは、却つて憚る少年の意を決した時であらう。「さあ、館の心に従ふまでは、村へも里へも歸さぬといったが、別に座敷牢へ入れるでもなし、木戸の扉も葎を分けて、ぎいと開け、障子も雨戸も開放して、真昼間、此の野を抜けて歸らるゝ

ものなら、勝手に歸つて御覽なさいと、然も輕蔑をしたやうに、
 あは、あは笑ふと両方の縁へふたつに別れて、二人の其の侍女
 が、廊下づたひに引込むと、あとはがらんとして 畳 数 十五畳
 も敷けようといふ、広い座敷に唯一人。」

折から炉の底にしよんぼりとする、掬ふやうにして手づから燻
 した落葉の中に一二枚ばかり荊の葉の太く湿つたのがいぶり出し
 た、胸のあたりへ煙が弱く、いつも勢よくは焚かぬさうで冷たい灰
 を、舐めるやうにして、一ツ蛭つて這ひ上るのを、肩で乱して払
 ひながら、

「煙い。其までは宛然恚う、身体へ絡つて、肩を包むやうにして、
 侍女の手だの、袖だの、裾だの、屏風だの、襖だの、蒲団だ

の、膳ぜんだの、枕まくらだのが、あの、所ところ狭せまきまでといふ風であつたのが、不のこらず残ざんずつと引込んで、座敷の隅すみ々ずみへ片かた着ついて、右も左も見通しに、開放あけはなしの野原も急に広くなつたやうに思はれたと言ひます。

然そうすると、急に秋風が身に染しみて、其の男はふるくと震へ出したさうだがね、寂しん閑かんとして人ひとツ児こひとり一人居さうにもない。

夢うつつか現まかと思う位。「

桂木は語りながら、自みづから其の境遇あに在ある如く、

「目を瞑ねむつて耳みみを澄すまして居ると、二重、三重、四重ぐらゐ、壁かべ越しに、琴ことの糸いとに風が渡つて揺れるやうな音で、細ほそく、ひゆう／＼と、お媪おばあさん、今お前さんが言つてる其の糸車だ。

此の炬を一ツ、恚うして爰で聞いて居てさへ遠い処に聞えるが、

其音が、幽にしたとね。

其時茫乎と思ひ出したのは、昨夜の其の、奥方だか、姫

様だか、それとも御新姐だか、魔だか、鬼だか、お閨へ召しま

した一件のお館だか、当座は唯赫と取逆上て、四辺のものは唯

曇つた硝子を透かして、目に映つたまでの事だつたさうだけ

ど。

緋の袴を穿いても居なけりや、搔取を着ても届ない、たゞ、輝

々した蒔絵ものが揃つて、あたりは神々しかつた。狭い一室

に、束髪たばねがみの引かけ帯ひつ おびで、ふつくりした美しい女が、糸車を廻し

て居たが、燭台につけた蠟燭の灯影に、横顔で、旅商人、私

の其の縁続きの美男を見向いて、

(主ぬしのあるものですが、一所いっしょに死んで下さいませんか。——と
唯ただひとこと一言ひとこといつたのださうだ。

いや、最もう六十になるが忘れないとき、此の人は又そ然ういふよ、
其れから此方こつち、都にも鄙ひなにも、其れだけの美女を見ないツて。

さあ、其の糸車のまはる音を聞くと、白い柔かな手を動かすま
で目に見えるやうで、其のまゝ氣の遠くなる、其が、やがて死ぬ
心こころもち持もちに違ひがなければ、鬼でも構はないと思つたけれども、
何どうも未まだ浮世うきよに未練があつたから、這はふやうにして、登あしおと音を
盗んで出て、脚絆きやはんを附けて草鞋わらじを穿はくまで、誰たれも遮さへぎる者はなか
つたさうだけれど、それが又、敵かこいの囿こいを蹴散けちらして遁にげるより、

工合ぐあいが悪い。

帰らるゝなら帰つて見ると、女どもが云つた呪詛まじないのやうな言ことばも凄すこし、一ひと足棟あしむねを離れるが最後、岸破がばと野が落ちて地の底へ沈まうも知れずと、爪立足つまだてあしで、びく／＼しながら、それから一生懸命けんめいに、野路のみちにかゝつて遁にげ出した、伊豆の伊東へ出る間道かんどうで、此処ここを放れたまで何の障さわりもなかつたさうで。

たゞ、些ちと時節ときせつが早かつたと見えて、三島の山々さんざんから一ひとなだれの茅萱ちがやが丈たけより高い中から、ごそごそと彼処あつちこつち此処このこ、野馬のうまが顔を出して人珍ひとめづしげに瞞みづめては、何処どこへか隠れて了しまふのと、蒼空あおぞらだつたが、ちぎれ／＼に雲の脚あしの疾はやいのが、何どんな変事へんじでも起らうかと思はれて、活いきた心地はなかつたと言ふ話ぢやないか。

それだもの、お媪ばあさん。」

六

「もし、そんなことが、真個ほんとうにある処ところなら、生命いのちがけだつてねえ、一度来て見ずには居られないとは思ひませんか。

何しに來たつて、お前さんが咎とがめるやうに聞くから言ふんだが、何も其の何どうしよう、恚こうしようといふ悪氣わるきはない。

好ものずき事ささ、好ものずき事さで、變つた話でもあつたら聞かう、不思議な

ことでもあるなら見ようと思ふばかり、しかしね、其を見聞みきくに
つけては、どんな又対あいて手に不心得があつて、危けん険のんでないとも限

らぬから、其処そこで恂こう、用心の銃をかついで、食べる物も用意した。

台場だいばの停車場ステーションから半道はんみちばかり、今朝けさ此原このへかゝつた時は、
脚絆きゃはんの紐ひもも緊しつかり乎と、草鞋わらじもさツくと新しい踏心ふみごころ地、一面
に霧のかゝつたのも、味方の狼煙のろしのやうに勇いさましく踏込ふみこむと、さあ、
一ツひと一ツひと、萱かやにも尾花おしなにも心を置いて、葉末はすえに目をつけ、根うかを窺が
ひ、まるで、美しい蕈きのこでも捜す形。

葉ぬしずれの音がざわくと、風が吹く度たびに、遠くの方で、
(主ぬしあるものですが、)とでも囁ささやいて居るやうで、頼母たのもしいにつ
けても、髑髏しやれこうべの形をした石塊いしころでもないか、今にも馬うまの顔つらが
出ではしないかと、宝たからの蔓つるでも手繰たぐる気で、茅萱ちがやの中の細路ほそみちを、

胸騒むなさわぎがしながら歩行あるいたけれども、不思議なものは樹きの根にも出で会くわささない、唯ただ、彼のあこはれ／＼の停車場ステーションのあとへ来た時、雨露あめつゆに曝さらされた十字の里程標りていひょうが、枯草かれぐさの中に、横になつて居るのを見て、何となく荒野あれのの中の礫はりつけ柱ばしらでもあるやうに思つた。

おゝ、然そういへば沢山たんと古い昔ではない、此の国の歴れきれき々々が、此処こに鷹狩たかがりをして帰りがけ、秋草あきぐさの中に立つて居た媚なまめかしい婦人おんなの、あまりの美しさに、予かねての色いろ好みこの、うっかり見惚みとれるはずみに鞍くらを外はずして落馬おちました、打うち処どころが病やまいのもとで、あの婦人おんなともを為させろ、と言いひ死じに亡なくなられた。

あとでは魔法づかひだ、主殺しゅころしと、可哀相あはれに、此の原はらで礫はりつけに

したとかいふ。

日本一の無法な奴等、かた／＼殿様のお伽なればと言つて、綾錦の粧をさせ、白足袋まで穿かせた上、犠牲に上げたとやら。

南無三宝、此の柱へ血が垂れるのが序開きかと、其十字の里程標の白骨のやうなのを見て居る中に、凭かゝつて居た停車場の朽ちた柱が、風もないに、身体からだの圧おしで動くから、鉄砲を取直しながら後退りに其処そこを出た。

雨は其の時から降り出して、それからの難儀さ。小糠雨の細かいのが、衣服の上から毛穴を徹して、骨に染むやうで、天窓は重くなる、草鞋は切れる、疲労は出る、雫は垂る、あゝ、新しい筵

があつたら、棺かんの中へでも寝たいと思つた、其で此の家を見つけ
 たんだもの、何の考へもなしに駈かけ込んだが、一呼吸ひといきして見ると、
 何どうだらう。」

炉ろの火はパツと炎尖ほさきを立てて、赤く媪おうなひたいの額いを射た、瞻みまもらるゝは
 白髪しろがである、其皺そのしわである、目鼻立めはなだちである、手の動くのである、
 糸車の廻るのである。

恚かくても依然として胸を折つて、唯糸ただに操あやつらるゝ如き、媪さまの状
 を見るにつけても、桂木は膝ひざを立てて屹きつとなつた。

「失礼だが、お媪ばあさん、場所は場所だし、末うらがれ枯だし、雨は降る、
 普通ただものとは思へないぢやないか。霧が雲がと押問答おしもんどう、謎なぞのか
 けツこ見たやうなことをして居るのは、最もう焦じれつたくつて我慢

が出来ぬ。そんなまだるつこい、氣の滅入る、糸車なんざ横倒しにして、面白いことを聞かしておくれ。

それとも人が来たのが煩くツて、癩に障つたら、さあ、手取り早く何うにかするんだ、牙にかけるなり、炎を吐くなり、然うすりや叶はないまでも抵抗しよう、善にも悪にも恚うして居ちや、じり／＼して胸が苦しい、じみ／＼雨で弱らせるのは、第一何にしる卑怯の到りだ、さあ、さあ、人間でさいなくなりや、其を合図で勝負にしよう、「と微笑を泛べて串戯らしく、身悶をして迫りながら、桂木の瞳は据つた。

血氣に逸る少年の、其の無邪氣さを愛する如く、離れては居るが顔と顔、媼は嘗めるやうにして、しよぼ／＼と目を睜き、

「お客様もう降つて居はせぬがなう。」

桂木「一驚を喫して、

「や何時の間に、」

七

「炉の中の荊の葉が、かちくと鳴つて燃えると、雨は上るわいなう。」

いかにも拭つたやうに野面一面。媪の頭は白さを増したが、桂木の膝のあたりに薄日が射した、但件の停車場に磁石を向けると、一直線の北に当る、日金山、鶴巻山、十国峠を頂い

た、三島の連山の裾すそが直ただちに枯草かれくさに交まじわるあたり、一帯の霧が細せせら流ぎのやうに靉靄たなびいて、空も野も幻の中に、一際濃ひときわこまやかに残るのである。

あはれ座右ざうのポネヒル一度ひとたび声を発するを、彼処かしこに人ありて遙はるかに見よ、此処ここに恰あたかも其の霧の如く、怪しき煙が立たうもの、

と、桂木は心も勇いさんで、

「むゝ、雨は歇やんだ、けれどもお媼おばあさんの姿は未だ矢張やっぱり人間だよ。」と物狂ものくるはしく固唾かたずを飲んだ。

此の時媼、呵から々と達者たっしやに笑ひ、

「はゝはゝ、お客様も余程のお方ぢやなう、しつかりさつしやれ、気分が悪いのでござろ。なるほど石ころ一つ、草の葉にまで、心

を置いたと謂はつしやるにつけ、何うかしてござらうに、まづま
 づ、横にでもなつて気を落着けるが可いわいなう、それぢやが、
 私を早や矢張怪しいものぢやと思つてござつては、何とも安堵
 出来悪かる、可いわいの。

もつともぢや、お主さへ命がけで入つてござつたといふ処、私
 がやうな起居も不自由な老寄が一人居ては、怪しうないことは
 なからうわいの、それぢやけど、聞かつしやれ、姨捨山という
 て、年寄を棄てた名所さへある世の中ぢや、私が世を棄て一人
 住んで居つたというて、何で怪しう思はしやる。少い世捨人な、
 これ、坊さまも沢山あるではないかいの、まだく、死んだ者に
 信女や、大姉居士なぞいうて、名をつける習でござらうが、何

で又、其の旅商人たびあきうどに婦人おんなが懸想けそうしたことを、不思議ぢやと謂はつしやる、やあ！」と胸のぼを伸して、皺しわだらけの大おおき手てを、薄うすいよれくゝの膝ひざの上うへ。はじめて片手ひとてを休やすめたが、それさへ輪りんを廻まわす一方ひとへのみ、左手ひだりては尚なお細こ長い綿わたから糸いとを吐はかせたまゝ、乳ちちのあたりあたりに捧たげて居ゐた。

「第一さつきまあ、先刻さつきから恚こうやつて鉄砲てつぱうを持つた者ものが入いつて来たののに、糸いとを繰くる手てを下したにも置おかない、茶ちやを一つ汲くんで呉くれず、焚火たきびだつて私わたしの方かたでして居ゐるもの、変かにも思おもはうちやないか、えゝ、お媪おばあさん。」

「これはくゝ、お前まへ様さまは、何なにと、働はたらきもの、愛想あいそのないものを、変化へんげぢやと思おもはつしやるか。」

「むゝ。」

「それも愛想がないのぢやないわいなう、お前様は可愛らしいお方ぢやでの、私も内端のもてなしぢや、茶も汲んで飲らうぞ、火も焚いて当らつしやらうぞ。何とそれでも怪しいかいなう」

「……………」桂木は返す言は出なかつたが、恚う謂はるれば謂はれるほど、却つて怪しさが増すのであつたが。

爰にいたりて自然の勢、最早与みし易からぬやうに覚ゆると同時に、肩も竦み、膝もしまるばかり、烈しく恐怖の念が起つて、単に頼むポネヒルの銃口に宿つた星の影も、消えたかと怯れが生じて、迎も敵し難しと、断念をするとともに、張詰めた気も弛み、心も挫けて、一斉にがつくりと疲労が出た。初陣の此の若

武者しや、霧に打たれ、雨に悩み、妖婆ようばのために取つて伏せられ、

忍しのびの緒おをプツツリ切つて、

「最もう何どうでも可ようございます、私はふらくくして堪たまらない、殺されても可いいから少しばらく時こ爰こで横よこになりたい、構かまはないかね、御免なさいよ。」

「おうく可いともなう、安心して一休み休まつしやれ、ちツとも憂きづ慮かいをさつしやることはないに、私わしが山猫の化けたのでも。」

「え。」

「はて魔の者にした処ところが、鬼神きしんに横道おうどうはないといふ、さあくかたげて寝やすまつしやれいのかく。」

桂木はいふがまゝに、兎とも角かくも横よこになつた、引寄せもせず、ポ

ネヒル銃のある処ところへ転げざまに、倒れて寝ようとする、

「や、しばらく待たつしやれ。」

八

「お前様一枚脱いでなり、濡ぬれたあとで寒うござろ。」

「震へるやうです、全く。」

「掛けるものを貸して進ぜましよ、矢張やっぱり内端うちわぢや、お前様立つ

て取らつしやれ、何なになう、私わしがなう、ありやうは此の糸の手を放

すと事ぢや、一寸ちよつとでも此の糸を切るが最後、お前様の身あぶなが危い

で、いゝや、いゝや、案じさつしやるないの。又また不思議がらつ

しやるが、目に見えぬで、どないな事があらうも知れぬが世間の習ならいぢや。よりもかゝらず、蜘蛛くもの糸より弱うても、私わしが居るからよ可いわいの、さあくゝ立つて取らつしやれ、被かけるものは、他ほかにない、あつても気味が悪からうず、少わかい人には丁ちようど度持つて来い、枯野かれのに似合ぬ美しい色のあるものを貸しませうず。

あゝ、いや、其みのの蓑ではないぞの、屏風びようぶを退のけて、其の蓑を取つて見やしやれいなう。」と糸車の前をずりもせず、顔ばかりふりむ振かた向かたく方。

桂木は、古ふるびた雨あまもり漏すみえだらけの壁に向つて、衝つと立つた、唯と見れば一いちりよう領ふるみの、古ふる蓑あめつゆが描すみえける墨うつぱり絵かかの滝うたがひの如ごとく、梁はりに掛かつて居ゐたが、見てははじめ、人からだの身体からだに着かるのではなく、雨あめつゆ露つゆを凌しのぐため、

あばらや
破家まに絡まうて置くのかと思つた。

はち
蜂の巢のやう穴だらけで、炉の煙は幾条いくすじにもなつて此処ここから
も潜もぐつて壁の外へ染にじみ出す、破屏風やれびようぶを取とりのけて、さら／＼と手
に触れると、蓑はすつぽりと梁はりを放はなれる。

こうかく
下に、絶壁の礮めぞめたる如く、壁に雨漏の線が入つた処ところに、す
らりとかゝつた、目覚めざめるばかり色好き衣いろよきぬ、慥かかる住居すまいに似合あひ余
りの思おもひがけなさに、媪おうなの通つうりき力ちから、枯野かれのちま忽みやまち深山みやまに變かじて、こゝ
に蓑の滝、壁いわおの巖いわお、もみぢの錦にしきかと思つたので。

みは
桂木は目を睜みはつて、

はあ
「お媪おばあさん。」

ちよう
「おゝ、其ぢや、何と丁ちようどよからうがの、取とつて搔かまきまき卷まきにさつし

やれいなう。」

もすそたたみ

裳は畳につくばかり、細く褌を引合せた、両袖をだらり

もと

うつせみ

と、固より空蟬の殻なれば、咽喉もなく肩もない、襟を掛けて

裏返しに下げである、衣紋は梁の上に日の通さぬ、薄暗い中に振

えもんうつぼり

うちぶ

りあお

仰いで見るばかりの、丈長き女の衣、低い天井から桂木の背を

のぞ

うすけむり

たちまよ

ひとつと

おみなえし

かれのたたず

覗いて、薄煙の立迷ふ中に、一本の女郎花、枯野にイ

さみ

しかなん

いきいき

しごきひとすじまと

んで淋しさう、然も何となく活々して、扱帯一筋纏うたら、

すそさば

おもかけ

ふち

裾も捌かず、手足もなく、倅のみがすらくと、炬の縁を伝ふで

あらう、と桂木は思はず退つた。

「大事ないく、袷ぢやけれど、濡れた上衣よりは増でござろ

ぬし

あわせ

ぬ

まし

わいの、主も分つてある、麗な娘のぢやで、お前様に殆ど可いわ、

其^{そのぬし}主もまたの、お前様のやうな、少^{わか}い綺麗^{きれい}な人と寝たら本望^{ほんもう}

ぢやろ、はゝはゝはゝ。」

腹^{ふくぞう}蔵^{ぞう}なく大^{おお}笑^{わらい}をするので、桂木は氣を取直^{とりなお}して、密^{そつ}と

先^まづ其^{たもと}の袂^{たもと}の端^{はし}に手を触れた。

途端^{とたん}に指^{さき}の尖^{さき}を氷のやうな針で鋭く刺さうと、天窓^{あたま}から冷^{ひや}りと

したが、小袖^{こそで}はしつとりと手にこたへた、取り外^{はず}し、小脇^{こわき}に抱^{かか}く、

裏^{うら}が上になり、膝^{ひざ}のあたり和^{やわら}かに、褌^{つま}しとやかに袴^{はかま}の裾^{すそ}なよく

と畳^{たたみ}に敷^敷いて、襟^{あおむ}は仰^{あおむ}向けに、譬^{たとえ}ば胸^{むね}を反^そらすやうにして、桂木

の腕^{うで}にかゝつたのである。

さて見れば、鼠^{ねずみ}縮^{ちりめん}緬^{めん}の裾^{すそ}廻^{まわ}し、二枚^{にまい}袴^{あわせ}の下着^{おぼ}と覺^{おぼ}しく、

薄^{うす}兼^{けん}房^{ぼう}よろけ縞^{じま}のお召^{めし}縮^{ちりめん}緬^{めん}、胴^{どう}抜^{ぬき}は絞^{しぼ}つたやうな緋^ひの童^{どう}卷^{まき}、

霜しもに夕日の色染そめたる、胴裏どううらの紅冷くれなく翻かえつて、引けば切れさうに振ふりが開あいて、媼おうなが若わかき時の名残なごりとは見ええず、当世の色あざやかに、今脱いまいだかと媚なまめかしい。

熟じつと見るうちに我にもあらず、懐なつかしく、床ゆかしく、いとしらしく、殊ことにあはれさが身に染しみて、まゝよ、ころりと寝て襟のあたりまで、銃ひつを枕まくらに引ひかぶる気になつた、ものの情なさけを知るものの、慥かくて妖魔の術中おちいに陥おちらうとは、いつとはなしに思ひ思はず。

九

「はゝはゝ、見れば見るほど良い孫ぢやわいなう、何どうぢや、少

しは落着かしやつたか、安堵して休まつしやれ。したかの、長いことはならぬぞや、疲労が治つたら、早く帰らつしやれ。

お前さま先刻のほど、血相をかへて謂はしつた、何か珍しいことでもあらうかと、生命がけでござつたとの。良いにつけ、悪いにつけ、此処等人の来ぬ土地へ、珍しいお客様ぢや。

私かの、然うやつてござるあひだ、お伽に土産話を聞かせましよ。」

と下にも置かず両の手で、静に糸を繰りながら、

「他の事ではないがの、今かけてござる其の下着ぢや。」

桂木は何時かうつらくして居たが、ぱつちりと涼い目を開けた。

「其は恁こうぢやよ、一ひとつき月の余も前ぢやわいの、何ともつひぞ見
たことのない、都みやこ風俗ふうぞくの、少わかい美しい嬢様が、唯ただ一人ひとり景色を
見いく、此の野へござつて私わしが処ところへ休ましやつたが、此の奥に
の、何なにとも名の知れぬ古い社やしろがござるわいの、其そこ処へお参詣まいりに行
くといはつしやる。

はて此の野は其のお宮みやの主ぬしの持物で、何をさつしやるも其の御み
心こころぢや、聞かつしやれ。

どんな願ねがいごと事ことでもかなふけれど、其かはり生命いのちを犠にえにせねば
ならぬ掟おきてぢやわいなう、何と又また世の中に、生命いのちが要いらぬといふ願ねがい
があるか、措おかつしやれ、お嬢様、御存じないか、というたれば。
いえく大事だいじござんせぬ、其を承知で参りました、といはつし

やるわいの。

いや最^もう、何^{なに}も彼^かも御存^ごじで、婆^{ばば}なぞが兎^とや角^こういふも恐^{おそれ}お

多^おいやうな御人^{ごじん}品^{びん}ぢや、さやうならば行^いつてござらつせえま

し。お出^いかけなさる時^{とき}に、歩^あ行^るいたせるか暑^あうてならぬ、これを

脱^だいで行^いきますと、其^そ処^こで帯^{おビ}を解^とかつしやつて、お脱^だぎなされた。

支^し度を直^{ただ}して、長^{なが}襦^{じゆ}袷^{ばん}の上^{うへ}へ拾^あ一^{いっ}つ、身^み軽^かになつて、すらく

草^{くさ}の中^{なか}を行^いかつしやる、艶^{つや}々^{つや}としたおつむりが、薄^{すす}の中^{なか}へ隠^かれ

たまで送^{おく}つてなう。

それから茅^{ちが}萱^やの音^ねにも、最^もうお帰^かかと、待^{まち}てど暮^くらせど、大

方^い例^つの^もにへにならつしやつたのでござらうわいなう。私^わがやうな

年^{とし}寄^{より}にかけかまひはなけれども、何^{なん}につけても思^{おも}ひ詰^つめた、

若い人たちの入つて来る処ところではないほどに、お前様も二度と来ようとは思はつしやるな。可いいかの、可いいかの。「と間あいを措おいて、
ゆる緩く引張つてくゝめるが如くにいふ、おうな媼ことばの言たえだえが断かすか々に幽かすかに聞え
 て、其の声の遠くなるまで、桂木は留南木の薰とめぎに又恍惚うっとり。

優しい暖かさが、身に染しみて、心から、草臥くたびれた肌を包むやう
 な、搔か卷まきの情なさけに半なかば眼まなこを閉ぢた。

驚破すわといへば、射いて落おとさんず心うも失せ、はじめのいちねん一念もも疾とく
 忘れて、野のにありといふふる古やしろ社、其あやしみの怪あやしみを聞きかうともせず、目ま
 のあたりに車を廻まわすあからさまな媼おうなの形かたちも、其そののまゝ昇かき移うつすや
 うに席むしろを彼方あなたへ、小こさく遠とほくなつたやうな思おもひがして、其そのの娘むすめも
にえ儀ぎの仔細しじょうも、媼おうなの素性すじょうも、野のの状さまも、我われが身みのことさへ、夢ゆめを

見たら夢に一切知れようと、ねむさに投げ出した心の裡。^{うち}

却つて爰に人あるが如く、横に寝た肩に袖がかゝつて、胸にひ

つたりとついた胴拔の、媚かしい下着の襟を、口を結んで熟と

見て、噫、我が恋人は他に嫁して、今は世に亡き人となりぬ。

我も生命も惜まねばこそ、恚る野にも来りしなれ、何うなりと

も成るやうになつて止め！ 之も犠になつたといふ、あはれな記

念の衣哉、としきりに果敢さに胸がせまつて、思はず涙ぐむ襟

許へ、颯と冷い風。

枯野の冷が一 幅に細く肩の隙へ入つたので、しつかと引寄せ

た下着の背、綿もないのに暖く二の腕へ触れたと思ふと、足を包

んだ裳が揺れて、絵の婦人の、片膝立てたやうな皺が、袷の縞

なりに出来て、しなやかに美しくなつた。

啊呀あなやと見ると、女の倂おもかげ。

十

眉まゆ長く、瞳ひとみ黒く、色雪の如きに、黒髪くろかみの鬢びん乱れ、前髪まへかみの根ねも分わかるゝばかり鼻筋はなすじの通つたのが、寝ながら桂木の顔を仰ぐ、白齒しらはも見えた涙の顔に、得えも謂いはれぬ笑えみを含んで、ハツとする胸むねに、媼おうなが糸いとを繰くる音ねとともに幽かすかに響こいて、

「主ぬしのあるものですが、一いっしよ所に死しんで下くださいませんか。」と声こゑあ
るにあらず、無なきにあらず、嘗かつて我が心こゝろに覚さえある言ことを引出ひきだすや

うに確たしかに聞えた。

耳がぐわつと。

小屋が土台から一ひとゆれ揺揺れたかと覚えて、物ものすさまじ凄まじい音がした。
 「姦婦かんぶ」と一いつかつ喝かつ、雷らいの如く鬱うつし怒いかれる声して、外との方に呼かたばは
 るものあり。此の声柱はしちを動かして、黒くろくすぶり燻すぶりの壁、其みの蓑みのの下、
 袷あわせをかけてあつた処ところくだん、件いの巖いわ形おがたの破目やれめより、岸破がばと倒どうだおし
 に裡うちへ倒れて、炉の上へ屏風びょうぶぐるみ崩れ込むと、黄に赤に煙が
 交まじつて※と砂ぼつ すなけむり煙あがが上つた。

ために、媼いぢしの姿が一時消えるやうに見えなくなつた時である。

桂木は弾はじき飛ばされたやうに一間けんばかり、筵むしろを彼方あなたへ飛び起たき
 たが、片手に緊しっかり乎なりと美人を抱いたから、寝るうちも放はなさなかつ

た銃を取るに違あらず。

兎角とかくの分別ぶんべつも未だ出ぬ前ま、恐い地震だと思つて、真蒼まっさおにな

つて、棟むねを離れて遁のがれようとする。

門かどぐち口くちを塞ふさいだやうに、眼まなこを遮さえぎつたのは毒霧どくぎりで。

彼の野末かののづえに一ひとながれ流ながれ白旗しらはたのやうに靡なびいて居たのが、横に長く、

縦に広く、ちらと動いたかと思ふと、三里の曠野こうや、真白な綿わたで包

まれたのは、いま遁にげようとすると殆ど咄嗟ほとん とっさの間の事こと。

然も此の霧の中に、野面のづらを蹴けかへす蹄ひづめの音、九ツならず十なら

ず、沈んで、どうと、恰あたかも激流地ちの下より寄せ来るく氣勢けはい。

「遁にがすな。」

「女！」

「男！」

と声々、ハヤ耳のあたりに聞えたので、又引返して唯壁の崩とくずれを見るひつかえと、ひとかたまり一団の大なる炎の形に破れた中は、おなじ枯野の目も遙に彼方に幾百里といふことを知らず、はるかかなた犇々ひしひしと羽目をはめ圧して、一体こゝにも五六十、神か、鬼か、怪しき人物。

朽葉色くちばいろ、灰ねずみ、鼠こげちや、焦茶たそがれ、たゞこれ黄昏の野の如き、霧の

衣ころもまを纏うたる、いづれも抜群の巨人である。中に一人真先いちにんまつさきかけ、壁の穴を塞いで居たのが、此の時、搔かいくぐ潜るやうにして、恐おそろしい顔を出した、面めんの大きおおき、梁はりの半なかばを蔽おおうて、血すじの筋走きんる金まなこの眼こにハタと桂木ねを睨めつけた。

思はず後居しりいに腰こしを突つく、膝ひざの上に真俯まうつぶ伏せ、真白ましろな両手りやうてを重かさね

て、わななく鬚まげの根、頸うなじさへ、あざやかに見ゆる美人の襟えりを、誰たが手ともなく無手むんずと取つて一ひとひし拉ひぎ。

「あれ。」

と叫んだ声ばかり、引断ひつちぎれたやうに残つて、袷あわせはのけざまに
 ずるたくと畳たたみの上を引摺ひきずらるゝ、腋わきあけのあたり、ちらくと、
のこ残のこの雪も消え、目も消えて、裾すその端が翻ひるがへつたと思ふと、倒さかしまに
 裏庭へ引落ひきおとされた。

「男は、」

「男は、」

と七ななツ八やっツ入いりみだ乱みだれてけたましい燈あしおと音が駈かけめぐる。

「叱しつ！」とばかり、此の時覚悟して立たうとした桂木の傍かたわらに引添ひきそ

うたのは、再び目に見えた破あばら家のおうな媪であつた、果はたせるかな、糸は其の手に無かつたのである。怒かかる時桂木の身あやは危あやふしとこそ予言したれ、幸さいわいに怪あやしき敵みいの見出だし得えぬは、由よしありげな媪あやが、身みを以て桂木かばを庇せふ所い為であらう。桂木はほつと一ひと息いき。

「何どこ処こへ遁にげた。」

「今ここ此こ処こに、」

「其そこ処こで見た。」

と魂たまぎ消なゆる哉かな、詈のり交しすわ。

恚いかくてしばらくの間あいだといふものは、轡くつわを鳴らす音、蹄ひづめの音、も
 のを呼ぶ声、叫ぶ声、雑ざつざつ々々として物騒ものさわがしく、此この破家あばらやの
 庭にわの如ごとき、唯ただ其そこ処こばかりを劃くぎつて四五本の樹立こたちあり、恚いかる広野ひろのに
 停車場ステーションの屋根と此この梢こずえの他ほかには、草くさより高く空を遮さへぎるものな
 い、其あの辺あたりの混雑あさ、多た人数にんずの踏ふみしだくと見えて、敷し満きちたる枯か
 草くさ、伏ふし、且かつ立ち、窪くぼみ、又倒またれ、しばらくも休やまぬ間あいだ間
いだ々々、目まぐるしきばかり、靴わらんじ、草鞋かばの、樺かかの踵かかと、灰汁あくの裏うら、爪つま
さき尖さを上うへに動かすさへ見えて、異類いぎよう異形いなるの蝗いなごども、葉末はずえを飛ひぶ
 かとあやまたるゝが、一ひと個つも姿は見えなかつたが、やがて、叱しつ!
 叱つ!と相伝あいつたふる。

しばらくして、

「静まれ。」といふのが聞えると、ひっそりした。

枯草も真直になつて、風死し、そよとも靡かぬ上に、あは

れにかゝつたのは彼の胴抜の下着である。

「其奴縛せ。」

「縛れ、縛れ。」と二三度ばかり言をかはしたと思ふと、早や引

上げられ、袖を背へ、肩が尖つて、振の半ばを前へ折つて伏せた

と思ふと、膝のあたりから下へ曲げて掻い込んだ、後に立つた一

本の榛の樹に、荊の実の赤き上に、犇々と縛められたのであ

る。

「さあ、言へ、言へ。」

「殿様の御意だ、男を何処へ秘した。」

「さあ、言つちまへ。」

縛くくされながら戦わななくばかり。

「そこ退のけ、踏んでくれう。」と苛いらてる音調、草が飛とびとび々々大跨おおまたに寝ねつきつしたと見ると、縞しまの下着は横よこざまに寝た。

艶えんなる棲つまがばらりと乱れて、たふれて肩を動かしたが、

「あゝれ。」

「業ごうちく畜、心に従はぬは許して置く、鉄くろがねむろの室に入れられながら、毛筋けすじほどの隙間すきまから、言語道断ふらちの不埒ふらちを働く、憎い女、さあ、男をいつて一所いっしょに死ね……えゝ、言はぬか何どうだ。」踏躪ふみにじる氣勢けはいがすると、袖もつれの縫えもん、衣紋えもんの乱れ、波ゆらに揺るゝかと震ふにつれて、霰あられの如く火花ひかりに肖にて、からゝと飛ぶは、可いたむべし傷、引敷ひっしかれ居

る棘とげを落ちて、血汐ちしおのしぶく荊つばきの実。

桂木こぶしは拳こぶしを握にぎつて石いしになつた、媪おうなの袖そでは柔なかに渠かを蔽おほうて引添ひきそひ居ゐる。

「殿、殿。」

と呼んで、

「其そのでは謂いはうとても謂いはれませぬ、些ちと寛くつろげて遣つかはさりまし。」

「可よし、さあ、何どうだ、言いへ。何、知らぬ、知らぬ 黙もくれ。」

男おとこを慕したふ女の心こころはいつも男おとこの居い所どころぢや哩わ、疾はやく、口くちをあけて、

さあ、吐はかぬか、えゝ、業ごうちく畜ちく。」

「あツ、」とまた烈はげしい婦人おんなの悲鳴なげ、此この際ときには、其その搔もがくにつれて、榛はんの木この梢こずえの絶たえず動うごいたのさへ留やんだので。

桂木は塞ふさがうと思ふ目も、鈴で撃つたやうになつて瞬またたき出来ぬのであつた。

稍ややあつて、大跨おおまたの足あとは、衝つと逆ぎやくに退しつたが、すつくと立た向ちむかつた様子があつて、切つて放したやうに、

「打て！」

「殺して、殺して下さいよ、殺して下さいよ。」

「いづれ殺す、活いけては置かぬが、男の居いどころ所を謂ふまでは、活いさぬ、殺さぬ。やあ、手ぬるい、打て。答しもとの音が長く続いて在あり所を語る声になるまで。」

「はッ。」

四五人で答へたらしい、荊いばらの実は又頻しきりに飛ぶ、記念かたみの衣きぬは左右

より、衣紋えもんがはらくと寄つては解とけ、解ほぐれては結むすぼれ、恰あたかも糸の乱るゝやう、翼裂けて天女てんによの衣ころも、紛々ふんふんとして大空より降ふり来るばかり、其の胸その反る時や、紅裏颯こううぎつひるがえと飜り、地に襟えりのうつむき伏す時、縞しまはよれくせなに背を絞つて、上に下に七しつてん八ぼつ倒とう。おもかげ 倂おもかげは近く桂木の目の前に、瞳ひとみを据すゑた目も塞ふさがず、薄うすむら紫さきに変あじながら、言はじと誓ふ口を結んで、然しかも惚ほれぼれ々と、男の顔を見詰みつむるのがちらついたが、今は恚こうと、一度踏みこたへてずり外はずした、裳もすそは長く草あおに煽つて、あはれ、口許くちもとの笑も消えんとするに、桂木は最もうあるにもあられず、片かた膝ひざ屹ぎつと立てて、銃かを搔取かいとる、袖そでを圧おさへて、

「密そつと、密と、密と。」

低声こゝえに畳たたみかけて媪おうなが制こした。

譬たとひ此の弾丸山を砕こいて粉にするまでも、四辺しへんの光景みひとつ単身みひとつで敵てきし難がたきを知らぬでないから、桂木は呼吸いきを引ひいて、力なく媪の胸むそに潜ひそんだが。

其その時とき最後の痛苦の絶叫、と見ると、苛さいまるゝ婦人おんなの下着、樹の枝に届くまで、すつきりと立つたので、我を忘れて突立つたち上あがると、彼方かなたはハタと又僵たおれた、今は皮かわや破れけん、枯草かれくさの白き上へ、垂たら々と血が流れた。

「此処ここに居る。」と半狂乱、桂木はつゝと出た。

「や、」「や、」と声をかけ合あせると、早はや、我が身体からだは宙あかに釣つられて、庭の土に沈どむまで、とばかり。

桂木は投落なげおとされて横になつたが、死を極きわめて起返おきかえるより先に、これを見たか婦人の念力、袖そでの折目おりの正しきまで、下着は起きて、何となく、我を見詰みつむる風情ふぜいである。

「静まれ、無体むたいなことを為申しもうす勿な。」

姿は見えぬが巨人の声にて、

「客きやくじん人何も謂いはぬ。

ただおみたち唯御身達のやうなものは、活いけて置かぬが夥間なかまの掟おきてだ。」

桂木は舌しゞまりて、

「……………」ものも言はれず。

「斬きつ了ちまへ！ 眷属けんぞくども等。」

きらりくと四振よふりの太刀たち、二刀ふたふりづゝを斜ななめに組くんで、彼方かなたあぎとの顚

と、此方こなたの胸、カチリと鳴つて、ぴたりと合せた。

桂木は切尖きつさきを咽喉のどに、劍の峰からあはれなる顔を出して、う

ろくおうな、媼おうなを求めたが、其の言ことばに従はず、故ことさらに死地しちに就ついたを憎

んだか、最もう影も形も見えず、推量と多く違たがはず、家も床ゆかも疾とくに

消えて、唯ただ枯野かれのの霧の黄昏たそがれに、露つゆの命の男女ふたりなり也。目を瞑ねむると、

声を掛け、

「しかし客人、死を惜おしむ者は殺さぬが又おきて掟あらかじだ、予め聞かう、主ぬしあ

る者と恋を為し遂とげるため、死を覚悟か。」

やや
稍激しく。

「婦人おんなは？」

「はい。」と呼吸いきの下で答へたが、頷うなずくやうにして頭つむりを垂れた。

「可し。」

改めて、

「御身は。」

諾なくと答へようとした、謂いふまでもない、此美人は譬たとひ今は世に亡なき人にもせよ、正まさに自分の恋人に似て居るから。

けれども、譬たとひ今は世に亡なき人にもせよ、正まさに自分の恋人であればだけでも、可怪おかし、枯野かれのの妖魔まじが振舞ふるまい、我とともに死なるといふもの、恐らく案山子かかしを剥はいだ古蓑ふるみのの、徒いたずらに風に煽あおるに過ぎぬも知れないと思つたから、おもはゆげに頭かしらを掉ふつた。

「殿、不実な男であります、婦人おんなは覚悟をしましたに、生命いのちを助かりたいとは、あきれ果てた未練者みれんもの、目の前でずた／＼に婦人おんな

を殺して見せつけてくれませう。」

「待て。」

「は。」

「客人が、世を果敢はかなんで居るうちは、我々の自由であるが、一ひとた度心を入交いれかへて、恚かかる処へ来るなどといふ、無分別むぶんべつさへ出さぬに於ては、神しんぶつ仏おはします、父君ちちぎみ、母君ははぎみおはします洛らくよ陽うの貴公子、むぎとしては却かえつて冥罰みょうばつが恐おそろしい。婦人おんなは斬きれ！ 然しかし客人は丁寧にお歸し申せ。」

「は。」と再び答へると、何か知らず、桂木の両手を取つて、優たすしく扶たすけ起したものがあつた、其が身に接した時、湿つた木の葉この薫かおりがした。

腰のあたり、膝ひざのあたり、跪ひざまずいて塵ちりを払ひくれる者もあつた。

銃ひっさをも、引上げて身に立てかけてよこしたのを、弱よわ々と取つて提ひっさげて、胸を抱いて見返ると、縞しまの膝ひざを此方こなたにずらして、紅くれないの衣きぬの裏、ほのかに男を見送つて、分わかれ惜おしむやうであつた。

桂木は倒れようとしたが、踵くびすをめぐらし、衝つと背後うしろむき向になつた、霧の中から大きな顔を出したのは、逞たくましい馬で。

これを片手で、かい退のけて、それから足を早めたが、霧が包んで、蹄ひづめの音、とゞろくと、送るか、追ふか、彼かの停車場ステーションのあたりまで、四間けんばかり間あわいを置いてついて来た。

来た時のやうに立停たちどまつて又、噫あゝ、妖魔にもせよ、と身を棄すて一いっしょ所に殺されようかと思つた。途端に騎馬ひきかえが引返した。其の間あわい

遠ざかるほど、人数を増して、次第に百騎、三百騎、果は空吹く
 風にも聞え、沖を大浪の渡るにも紛うて、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど
 ツと野末へ引いて、やがて山々へ、木精に響いたと思ふと止んだ。
 最早、天地、処を隔つたやうだから、其のまゝ、銃孔を高
 くキラリと揺り上げた、星一ツ寒く輝く下に、路も迷はず、夜に
 なり行く狭霧の中を、台場に抜けると点燈頃。
 山家の茶屋の店さきへ倒れたが、火の赫と起つた、囲炉裡に鉄
 網をかけて、亭主、女房、小児まじりに、餅を焼いて居る、此
 の匂をかぐと、何ういふものか桂木は人間界へ蘇生つたやうな
 心持がしたのである。

汽車がついたと見えて、此処まで聞ゆるは、のんきな声、お弁

当は宜し、
お鮨はいかゞ。
……

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「新小説」

1903（明治36）年1月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二世の契

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>